●学内におけるボランティア活動の実践と参加のきっかけの提供

ボランティア･NPO活動センターでは、学生スタッフが中心となり、本学学生にとってボランティアの第一歩となるような様々な活動や啓発の場を学内で提供しています、学内で日常的あるいは定期的に行えるボランティア活動や、学内において実施するイベントなどがきっかけで学生が社会での課題に気づき、ボランティアの裾野を広げることを目的としています。

企画名　タイトル	伏見月間カレンダー
報告者名	竹本　真梨　（法学部　政治学科　３年次生）
日　　時	2010年３月～2011年２月
場　　所	深草キャンパス　樹林掲示板
実施主体	ボランティア・NPO活動センター

■経緯・目的

大学周辺（伏見区）のまちづくりに関するボランティアやイベントをより多くの本学学生が知り、大学周辺の地域に興味や関心を持ってもらい、地域への活動を促すことが目的です。

■概　　要

・大学周辺地域（伏見区中心に）のボランティアやイベントを毎月ごとに更新しながら紹介
・カレンダーのレイアウトで掲示し、季節やボランティア・イベントの内容に合わせて装飾も行いました。

■参加者の声・得られた効果など

掲示板を見た方には「目を引く」、「季節感があって見やすい」などの声がありました。当センターの掲示板は樹林の出入り口に面していること、掲示板を毎月こまめに更新しているところも少なかったため、掲示板を見ている方が割と多かったです。

■学んだこと・今後の課題

今回の企画で私たち企画メンバーも伏見区のボランティアやイベントの情報を調べていくうちに、地域には私たちが知らない様々なボランティアやイベントなどの取り組みがあることを知り、学ぶことが多かったです。残念ながら、今回の掲示板を毎月更新すること、実際紹介したボランティアやイベントがどの程度学生に効果があったのかを図ることが出来ていなかったのが反省点です。今回の反省点から、単に地域の情報を発信するだけでなく、学生に地域への活動を促すためには発信した後の効果や反応を知ることを大切にしなければならないと実感した。今後の企画をするうえでこれらの反省点を活かし、一人でも多くの学生に地域で活動してもらえるよう活動を行っていきたいと考えています。

企画名　タイトル	リユース傘貸し出しプロジェクト
報告者名	横関つかさ　（法学部　政治学科　３年次生）
日　　時	2010年４月１日～2011年３月31日（現在継続中）
場　　所	ボランティア・NPO活動センター　深草キャンパス事務局内
実施主体	ボランティア・NPO活動センター
利用延べ人数	98人（学内98人・学外０人）

■経緯・目的

傘を持っていない日に雨が降ってしまい、その時のためだけに傘を購入するのは“もったいない”との考えから、2005年から始まった本プロジェクトを今年度も継続しました。

■概　　要

①不要になった傘の中で、リユースに使える傘を選別し、個体番号をつけるます。
②事務局のカウンター前の傘立てに常備し、貸出します。（対応はその時センターにいる学生スタッフや職員で行う）
③貸出しの際には学生証の提示を求め、名前、学籍番号、連絡先を所定の用紙に記入してもらいます。
④貸出し期間は原則１週間とし、それまでに返却されなかった場合は担当者が連絡先に電話で返却依頼を行います。
⑤貸出しの状況は担当者が月毎に統計を取ります。

■参加者の声・得られた効果など

貸出しの際に対応するスタッフが手続きの合間にボランティアやイベント情報を提供することで、当センターの事業などを知ってもらうきっかけの１つになっています。

■学んだこと・今後の課題

個人的ではありますが、本プロジェクトの責任者であるにも関わらず、この１年は管理体制が甘かったと反省しています。本来一番利用者が多い梅雨の時期に貸出し用の傘が不足していました。傘の入手に動き出すのが遅くなったことで、貸出し数が昨年度より大幅減少したという結果が出てしまい、管理の重要性を再認識することになりました。
来年度より、複数のスタッフによる担当者制としたので、今後はそれぞれのメンバーが協力しあってプロジェクトの運営が活性化することを期待しています。

具体的な今後の課題としては利用者が貸出された傘を紛失した場合、従来は紛失者が代わりにリユース用に使用する傘を提供することになっていましたが、紛失者がこの傘を新たに購入して提供するという、本プロジェクトの趣旨から外れる事態が発生しました。貸出された傘を失くしたことに対する責任と、このプロジェクトのねらいの間の矛盾については、今後検討していく必要があると考えています。
＊統計の降雨日数に関しては気象庁HP（http：//www.jma.go.jp/jma/index.html）を参照。１㎜以上の降雨があった日を降雨日として計算。

リユース傘貸出し一覧

	貸出し数	返却数	未返却数	返却率	雨天日数
2010/04	20	18	2	90%	11
/05	14	12	2	86%	9
/06	6	5	1	83%	15
/07	30	26	4	87%	12
/08	1	1	0	100%	3
/09	4	3	1	75%	7
/10	5	5	0	100%	9
/11	2	1	1	50%	2
/12	13	11	2	85%	8
2011/01	0	0	0	－	3
/02	3	1	2	33%	7
計	98本	83本	15本	約85%	86日

企画名　タイトル	ECOキャップ回収大作戦
報告者名	楠上　光弘（法学部　法律学科　３年次生）
日　　時	2010年４月１日（木）～2011年３月31日（木）
場　　所	深草キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（深草）
参加人数	のべ20人（回収されたキャップを工場へ運んだ人数）

■経緯・目的

２年前の10月からスタートした企画で、省エネ推進委員会（現:地球温暖化対策推進委員会）からいただいたごみ箱を改造し、作成したキャップ回収箱を学内に設置し、ペットボトルのキャップを集め、環境について意識してもらうことをきっかけに始動した企画です。

■概　　要

深草キャンパス内にごみ箱を改造した８個のキャップ回収箱を設置し、ペットボトルのキャップを回収しています。回収したキャップは、学期末にまとめてリサイクル工場（株式会社エム・アール・シー）へ運びました。

ペットボトルキャップを分別回収することで、焼却されると800個で約７kgのCO^2が発生するのを防ぎ、また、キャップを外すことで、再資源率が37％向上します。さらに、キャップ800個を集めるとポリオワクチン一人分になります。

■参加者の声・得られた効果など

今年度の回収状況は以下のとおりです。

回収月	回収量	個数	発生しなかったCO^2量
10月	40kg	約16,000個	約126kg
３月	約33.7kg	約13,480個	約106kg
合　計	約73.7kg	約29,480個	約232kg

（参加者の声）

- 回収を行い、実際工場へ持って行くことで、日常で出されているペットボトルの量の多さにとても驚きました。
- 学内で回収されたキャップの収集中等に「お疲れ様」「キャップ持ってきたで」などの声をかけられて、周りに自分たちの活動が広がっていると思い嬉しかった。

■学んだこと・今後の課題

この企画の良かった点としては、たくさんの注目を集められたこと、この活動をする際に多くの協力を得られ、関心を持ってもらえたことがあげられます。

この企画は３Ｒ（リデュース・リユース・リサイクル）の推進を考え、ペットボトルの消費を減らそうと始めた活動でした。幸いなことに、キャップの回収率は増加し続けました。

回収をする中で、企画メンバー自身がこの問題についてもっとよく知るために勉強会や実際に工場見学することが必要だと感じ、メンバーそれぞれが、勉強会や工場見学に行きました。そこで日常で多く消費されているペットボトルを目の当たりにしました。その状況を企画メンバーで共有する中で「キャップの回収より、まずペットボトル自体の使用量を減らすべきではないか」と思うようになりました。

一方、このキャップ回収活動をしていくうちに、キャップをワクチンに変えるということばかりに注目が集まり、また、削減に関するアプローチもできない中、日々キャップの回収量が増えていき「自分たちはペットボトルを減らそうとしていたのに、今の活動はペットボトルの消費を容認しているのでは？」という矛盾を感じるようになりました。矛盾を持ったまま活動していくことに疑問を感じ、回収を始めた当初のメンバーがいる間に、この活動は一度立ち止

まり、終了しようと決意しました。

終了に伴い、これからは、キャップ回収箱のもととなるごみ箱をいただくなど支援いただいた省エネ推進委員会（現：地球温暖化対策推進委員会）、キャップを持っていっていた株式会社エム・アール・シーに、私たちの意図を報告し、ペットボトルの使用量を減らすために、学内でポスターなどを掲示していき、啓発活動を行っていく予定です。

企画名　タイトル	深草広報誌「ボラゴン」
報告者名	池上　眞平　（法学部　法律学科　２年次生）
日　　時	2010年４月１日（木）～12月31日（金）
場　　所	配架場所：ボランティア・NPO活動センター（深草） 手 配 り：大学生協前、正門前
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（深草）広報班
来場者数	制作：８人　　延べ配布数：1200部

■経緯・目的

- 少しでもボランティアに興味がある・ボランティアに興味がない・当センターを知らないという龍大生が、広報誌を見ることによってボランティアに行ってみたいと思ってもらうことを目指しています。
- ボランティア・NPO活動センターのことをもっと龍大生に知ってもらい、来室者を増やすことを目指しています。

■概　　要

春号（A5）

○ボランティア・NPO活動センター紹介

○学生スタッフからのメッセージ

…代表・副代表からのメッセージ

夏号（A5）

○夏ボラどんなん？

…夏のボランティアの特徴を紹介

○サークル情報交換会の紹介

○伏見区野宿者支援プロジェクトのお知らせ

○伏見月間カレンダーの紹介

秋号（A5）

○What'sボラセン－ボランティア相談編－

…来室者対応の様子を紹介

○アフターショック

…龍谷祭展示会のお知らせ

○10周年記念事業のお知らせ

冬号（A5）

○ボラセン使い方診断

…ボラセンへ興味を持ってもらえるように、チャート式診断テストを紹介

○突撃スタッフインタビュー

…スタッフの紹介

○10周年記念事業を終えての報告

■参加者の声・得られた効果など

- センターの活動や学生スタッフの存在などを知ってもらえた。
- 大学内での手配り中に、一般学生のほうから広報誌を取りに来てくれました。

■学んだこと・今後の課題

去年同様、自分たちだけが満足する内容ではなく、読む学生が満足できる内容を限られたページ数で表現することや、どのような表現をすることがよりわかりやすく伝えることができるのか、ということが難しかったです。今年度からは広報誌に「学生スタッフが思いを語れる」

という役割を付け加えることにより、広報班含め学生スタッフの声を多く載せることとなり、自分の経験を言葉にする大切さや難しさなどを学びました。

今後の課題は「どのようにすれば学生が取ってくれるのか」、「どのような内容が学生のボランティアへの意欲やセンターの認知度を高められるか」ということ、そしてより読みやすいような工夫を考えていきたいです。また、引き続き配架数を把握することに努めたいと思います。

企画名　タイトル	アフターショック～災害ボランティア・私たちにできること～
報告者名	竹本　真梨　（法学部　政治学科　３年次生）
日　　時	2010年11月５日（金）～７日（日）　10時00分～ 16時00分
場　　所	深草キャンパス　21号館404教室
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（深草）
来場者数	110人

■経緯・目的

龍谷大学は伏見区内の広域避難場所の一つであり、11月の学園祭では、大学周辺の住民の方や学生が一堂に集まる。この機会に、学生と地域の方々に10周年を迎える当センターの設立のきっかけの一つとなった兵庫県南部地震（阪神淡路大震災）、京都（伏見区）の災害の様子などを紹介し、災害当時の様子や防災の大切さを知ってもらう。また、災害に備えて日頃何をすればいいのか、災害発生時に「何か行動を起こしたい」と思ったときにどうすればいいのか等、ボランティアを通して災害への多様な貢献の仕方を紹介する。それらを通して、今回の展示会が参加者にとって今後自分にはどのようなことができるのかを考え、行動するきっかけになる展示にする。さらに、今回の展示会で地域と学生がお互いの事を知り、地域と学生が繋がることが、災害時に相互の命を守ることにも繋がることを認識してもらえるきっかけにしたいとも考えている。

■概　　要

＜展示内容＞

兵庫県南部地震・京都の災害の状況やその当時のボランティア活動、伏見区内災害に関する取り組み、災害に関するボランティアの窓口紹介などをパネルや写真、模造紙、映像などを使って本学学生や地域の方に災害や防災、災害ボランティアについて関心を持ってもらえるような展示を行った。

＜災害ボランティア講座・寸劇＞

日時：2010年11月５日（金）　13時30分～ 15時

場所：深草キャンパス　21号館404教室

講師：横井 真 主事（京都市伏見区社会福祉協議会）

○講座

伏見区社会福祉協議会より横井主事を招き、災害時の災害ボランティアセンターの役割や災害ボランティア活動についての説明、また日頃から心がけておくべきことなど、防災についての説明をして頂いた。

○寸劇

伏見区で大地震が発生したというシナリオで、災害時のボランティア活動・ボランティアする際の注意、災害に備えた普段からの取り組みなど内容を盛り込んだ深草学生スタッフ全員参加の劇を行った。その後、講座に参加された砂川学区の町内会長や地域の方々、学生から質問・感想を出して頂いた。

■参加者の声・得られた効果など

阪神淡路大震災の被害の悲惨さや災害ボランティアの様子、を視覚的に分かりやすく来場者に伝えたことにより、展示を見た参加者からは「写真が多くてパネルもあり視覚的に分かりやすくて良かった」、「災害は、いつ起こるか分からないから日頃から防災に備えておきたいと思った」、「災害ボランティアセンターや防災マップなど地域では様々な取り組みが行われていることを初めて知った」などの多くの意見を頂いた。また、災害ボランティア講座・寸劇の参加者である学生や地域の方には「日常の福祉活動やコミュニティ活動が活発な地域では、災害時においても助け合いがスムーズとなる事を知ることが出来た」、「被災者支援のボランティアを行いたい時に、現地へ駆けつけた後の手順を知ることができ、自分もいざとなったら活動できるのではないかと感じた」、「最初、災害ボランティアは何をするのか分からなかったが、ボランティアの活動が寸劇によって良く理解できた」という声を聞くことができた。さらに、参加者と質問・感想の意見交流した際に、龍谷大学の災害に対する取り組みである貯水ポンプやため池などについても参加者に知ってもらう事が出来た。

このことからパネルや資料により、普段から災害に対する意識を強く持ってもらい、災害から身を守る為の事前準備、避難の仕方、避難場所などを学んで頂けたのではないかと感じた。またそれと同時に、災害が起きた時にはどこに行けば被災地にボランティアとして関われるのか、情報を掴めるのか、災害ボランティアとはどのような役割があるのか、災害が起こった時に被害を最小限に抑えるには日頃からの地域との関わりが重要であることなどを伝えることができたと思う。今回の展示を通して、私たちだけでなく参加者の災害やボランティアの意識も高まったのではないかと感じた。

■学んだこと・今後の課題

今回の企画は７月から取り組み、防災センターの施設見学や勉強会、災害ボランティアのインタビューの実施、また社会福祉協議会の方を招き講座・寸劇を行ったことは初めての試みであり、協働して取り組んだことは地域と学生にとって交流する貴重な場になった。それと同時に、企画を進めていく過程の中で、災害の悲惨さや自分の身の回りにはいつ災害が起きてもおかしくない状況であること、もし災害が起きた時に被災地に対してどのようなボランティアや支援活動ができるのか、災害ボランティアセンターやボランティアとはどのようなものなのか、災害時に連携を取るためには普段からの地域や様々な団体との関係づくりの大切さを学ぶことが出来た。また、自分たちが作成した展示が形となったものを見ることにより自分たちが行ったことの達成感、参加者の方々から感想を聞き、自分たちの伝えたかったことが一人でも多くの人に伝わったことを実感した。

しかし、企画内容を詰めるまでに約１ヶ月半、資料を収集し皆に共有するまでに約１か月半ほ

ど時間がかかり、それらをまとめて実際に展示物の作成に取り掛かかったのは10月に入ってからであった。そのため11月の龍谷祭に間に合わせるにはあまり時間がなく、連日ミーティングルームに残りあわただしく作業を行っていた。もっとスタッフ全員に協力を仰ぎ役割分担して作業すること、企画立案時からの企画のスケジュールの大切さを改めて感じた。その他にも、広報や参加者への対応、パネルを作成の工夫など多くの課題が残る展示会であった。

それらの反省を今後に生かすためにも、しっかりと企画の流れや広報の仕方、今回の企画で学んだことを記録に残していくことを考えている。また、今回は「災害ボランティア」というテーマを通して、地域と学生を繋げるきっかけ作りとしてこの展示会を行ったが、今後はこの展示会を通して得たたくさんの繋がりや学びをより深く出来るよう、伏見区の地域の行事やボランティアに学生の参加を促し、地域と学生を繋げる持続的な活動していきたいと考えている。

企画名　タイトル	Reーキャッププロジェクト
報告者名	栗原　啓拓　（社会学部　社会学科　１年次生）
日　　時	2010年４月１日（木）～ 2011年３月31日（木）（現在継続中）
場　　所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
参加人数	54人（瀬田キャンパス学生スタッフ全員）

■経緯・目的

昨年度に引き続き、学内のペットボトルキャップ分別専用のゴミ箱を通して、学生のリサイクル意識を高める活動に取り組みました。また集められたキャップは、障害者福祉サービス事業所むつみ園に引渡し、障がい者の自立支援にもつなげています。

■概　　要

○学内での取り組み（通年）

①キャンパス内の清掃員の方が回収したキャップをコーディネートシフトに入っている学生スタッフが、ゴミ集積所から回収する。→②キャップを水に浸し洗浄する。→③次のシフトの学生が水から引き上げ、布に広げて乾かす。→④乾いたキャップはまとめてビニール袋に入れて保管する。→⑤むつみ園へ引き渡し。

○施設見学（８月～９月）

私たちが回収したキャップがどのような過程を経てリサイクルされるのか、むつみ園とリサイクル工場エコパレット滋賀への見学を実施しました。

■参加者の声・得られた効果など

○今年度の回収状況

回収月	回収量	個数	発生しなかったCO^2量
４月	約6kg	約2,730個	約21.5kg
５月	約16kg	約7,280個	約57.3kg
６月	約11kg	約5,005個	約39.4kg
７月	約15kg	約6,825個	約53.7kg
８月	約12 kg	約5,460個	約43.0kg
９月	約11 kg	約5,005個	約39.4kg
10月	約20 kg	約9,100個	約71.7kg
11月	約12 kg	約5,460個	約43.0kg
12月	約6 kg	約2,730個	約21.5kg
１月	約10 kg	約4,550個	約35.8kg
２・３月	約15 kg	約6,825個	約53.7kg
合　計	約134kg	約60,970個	約480.1kg

○施設見学に参加した学生スタッフの感想

【むつみ園】

- 私たちが回収しているキャップがどのように活かされ、どのようにリサイクルされていくのかある程度分かりました。また、施設の方たちとふれあうことができ、普段できない貴重な体験ができたので、ぜひまたこのような体験をしてみたいと思いました。
- センターとキャップだけの繋がりではなく、施設を訪問することで、むつみ園の障がい者への自立支援の様子などを見ることが出来て、繋がりができたことが成果です。また、キャップの仕分け作業を一緒にすることもできたので、良かったです。
- センターにキャップを回収しに来られるむつみ園の方を何度か見かけた事はあっても、実際にどのような活動をされているのかは知りませんでした。今回は見学だけではなく、働いている方と共に作業させて頂く事ができてとても良かったです。

【エコパレット滋賀】

- 今回参加させてもらい、ペットボトルキャップだけを集めると素晴らしい再資源になるのに、分別を行わなければ、家庭のプラスチックゴミと一緒にされることを知り、ショックを受けました。分別という一つの手間で、ペットボトルキャップでもお金にもなりえることを学び、リサイクルの重要性を学ぶことができました。
- 実際に学内で集めたキャップがむつみ園さんを経由しどのような流れでプランターに再利用されているかなどが分かり、リサイクルを体感することができ、大変勉強になりました。
- 滋賀県の環境問題を中心に今、日本で起きている問題も教えて頂き良かったです。

■学んだこと・今後の課題

２つの施設見学は、キャップがどのようにリサイクルされているのかを体験でき、自分達の活動が環境問題だけでなく、障がい者の自立支援に携わっているということも改めて実感しました。

今期はリサイクルなどの啓発活動を行なわなかったので、学生の認知度はあまり高まらなかったのが反省点です。また、ツアーに参加しなかった学生スタッフからは、もっとむつみ園との関わりを増やして欲しいとの声もありました。

これらを踏まえて、来期は学生への啓発活動や施設訪問の機会を増やし、より広い範囲で知られるような活動にしていきたいです。

企画名　タイトル	瀬田広報誌「Volunteer News」
報告者名	羽村　美咲　（社会学部　臨床福祉学科　２年次生）
配布期間	2010年４月20日（火）～2011年１月７日（金）
配布場所	瀬田キャンパス内
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）広報班ボラセン係
参加人数	制作：瀬田学生スタッフ６人　配布部数：1,540部

■経緯・目的

ボランティア・NPO活動センター（瀬田）の学内での認知度向上のため、また、より利用しやすいセンターにするため、学生スタッフの目線ならではの広報誌を制作しました。

センターの活動や企画を掲載することで、本学学生にセンターのことを知ってもらうきっかけにすることや、１人でも多くの人にボラン

ティアに興味を持ってもらうことを目的としています。

■概　　要

○内容

第２号（４月／ 360部発行）
- センター紹介
- 学生スタッフについて
- コーディネートについて
- 2009年度活動内容

第３号（６月／ 350部発行）
- センター紹介
- 企画紹介
- 丸屋町夜市ボランティア募集、感想

第４号（10月／ 450部発行）
- センター紹介
- 龍谷祭展示「ボラ展」の宣伝
- 丸屋町夜市ボランティアの報告、感想
- 国内研修の報告
- キャップリサイクル活動について

第５号（１月／ 380部発行）
- 「くさつ子どもフェスタ2011」のボランティア募集
- 10周年記念事業の報告

○設置場所、配布について
- ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
- ボランティアコーナー（※別ページ参照）
- 学生スタッフの手配りで配布

■参加者の声・得られた効果など

毎回の広報誌の発行により、センターへの来客者数の増加に貢献、また、各企画の宣伝を広報誌によって行い、参加者の増加にもつなげることが出来ました。数多くの学生に広報誌を手渡すことができ、少しでもセンターの知名度が上がったように思われます。

■学んだこと・今後の課題

記事を手書きからパソコンで制作することにより、見やすくなり読んでもらいやすくなったと思います。また、各ページに担当者をあて、それを編集者がまとめていくという形で制作しましたが、初めのうちは文字のサイズやフォント、用紙のサイズが各担当者で違っていて、編集者の負担が問題になりましたが、それらを統一することで班員の中で負担を分散し、効率的に制作していけるようになりました。余裕を持って制作することで、質の向上にもつなげられたように思います。

より「読む側」の立場で考えてみることで、いかにして読んでもらえる記事に出来るか、センターのことを知ってもらえるか、ということをつきつめていき、センターの認知度を上げることのできる広報誌にしていきたいです。

企画名　タイトル	ボランティアコーナー
報告者名	藤田　華保（社会学部　臨床福祉学科　２年次生）
設置期間	2010年４月２日（金）～　2011年１月31日（月）
設置場所	青志館１階（階段前）
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）広報班ボラ募集係
参加人数	６人

■経緯・目的

今まで瀬田キャンパスのボランティア･NPO活動センターでは、センター内に入らないと学生がボランティアや講演会のチラシを取れませ

んでした。そこで、センター外にチラシを配架するコーナーを設置し、センターの知名度を上げるとともにボランティア活動の啓発を行うことを目的として実施しました。

■概　　要

- 青志館１階（階段前）にパンフレットスタンドを設置し、ボランティア情報やボランティア保険の説明などのチラシを配架しました。（春季や夏季休暇期間は設置なし）
- 福祉・国際・環境それぞれの分野から計９種類のチラシを選びました。
- チラシ選びは「広報班」で係を決めて実施しました。
- 学生スタッフにもオススメのチラシがないか選んでもらうように呼びかけました。
- チラシを選ぶ際にその募集団体が活動保険に入っているかの確認をしました。
- チラシの交換は１カ月ごとに行いました。
- １週間に１回、チラシがなくなっていないかの確認をし、チラシの補充などをしました。

■参加者の声・得られた効果など

- チラシをセンター外部に置くことで、センターに来室しない学生もボランティアに関心があり、チラシを取ることがわかりました。
- 学生スタッフがボランティアのチラシを確認でき､内容をきちんと知る機会が増えました。

■学んだこと・今後の課題

- チラシを選ぶ人が偏ってしまっていたので、いろんな人に選んでもらえるようにしていきたいです。
- １カ月経ってもチラシが交換できてなかったことがあったので、これからは交換日にチラシを変えられるよう心がけたいと思います。
- ラックがあまり目立たないので、もっと学生の目を引くようなデザインにしたいと思います。
- 来年度からは、企画としてではなく、学生スタッフの係の日常的な活動として運営していきたいと思います。

企画名　タイトル	Let'sボランティア　～ボランティアしませんか？～
報告者名	笠間　ゆかり　（社会学部　地域福祉学科　３年次生） 藤田　華保　　（社会学部　臨床福祉学科　２年次生）
日　　時	前期：2010年６月28日（月）～７月２日（金）12時00分～ 14時00分 後期：2011年１月11日（火）～１月14日（金）12時00分～ 13時45分
場　所	前期：瀬田キャンパス　野外ステージ前 後期：瀬田キャンパス　交流会館１階アッセンブリコーナー
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
来場者数	前期：本学学生61人　後期：本学学生23人

■経緯・目的

瀬田キャンパスのボランティア・NPO活動センターでは、来室する学生がセンターに入りにくく感じているという課題があります。それを解決する為に、センターの外に出てボランティア相談などを行い、センターの認知度の向上、センターに入りやすいきっかけづくり、またボランティア活動の普及につなげることを目的とし、この企画を立ち上げました。

昨年度の１月に「出張ボラセン」を実施した

のですが、その時の課題点を改善するように前期と後期でそれぞれ工夫しました。前期、「出張ボラセン」から大きく改正した点は、チラシを分野ごとに分けないという点、１週間続けて実施した点、出張ボラセンという名前から「Let`sボランティア」という名前に変えたという点です。また後期は、コーディネート用のブースは設けないという点も追加しました。

■概　　要

【前期】

- 野外ステージ前にブースを設け、学生にボランティアをコーディネートするブースと、学生がボランティアのチラシを自由に取れるようにしたブースに分けました。
- 学生スタッフに協力を求め、ブースに配置する人を前半（12時～13時）と後半（13時～14時）に分け、シフト制にしました。
- ボランティアのチラシは、広報班の中で担当する係が福祉・環境・国際の分野のものを全部で11種類選び、それを詳しくまとめたものをファイリングし、学生スタッフのコーディネートに役立てるように工夫しました。

【後期】

- アッセンブリコーナーのグラウンド側半分にブースを設け、壁や窓にセンターで実施した企画の写真を貼るなどレイアウトを工夫しました。ブースにはチラシを置いた机を４脚用意し、来場者が自由にチラシを取れるようにしました。
- 前期同様、ブースに配置する学生スタッフをシフト制にし、A（12時～12時45分）、B（12時45分～13時15分）、C（13時15分～13時45分）に分けました。
- チラシの選び方や活用方法も前期と同様にし、全部で12種類設置しました。
- 来場者には、学生スタッフが積極的に話しかけるよう心がけてもらい、センターのパンフレットや広報誌の配布を行いました。また、コーディネート班という学生スタッフの班が考えたアンケートを実施しました。

■参加者の声・得られた効果など

【前期】

- 前年度の「出張ボラセン」の反省を活かし、来場者を増やすことができました。
- ボランティアのチラシを取りやすくすることができました。
- 本学学生にセンターを知ってもらう良い機会になりました。

【後期】

- 実際センターまで来てくれて、ボランティア相談につなげられた人もいました。
- 来場者にはセンターのパンフレットや広報誌を配布することで、センターを知ってもらう良いきっかけになったと思います。
- アンケートを行うことで、本学学生がセンターに対してどのようなことを思っているのか生の声を聞くことができました。

■学んだこと・今後の課題

【前期】

センターがどこにあるのか、何をしているところなのかというアピールができなかったので、次回はセンターのパンフレットや広報紙、センターを指し示す矢印を描いた看板をブースに設置したいと思います。また、何をやっているのか遠くから見て分からないという声があったので、360度周りから見ても学生の目を引くように、看板を大きく目立たせるようにします。

今回の企画を通して、どうすればもっと学生にとって来やすくなるのかということを考えたり、活動の振り返りをしっかりして、継続していくことの大切さを学びました。

【後期】

室内での実施となり、どうしても目立ちにくく、なかなか学生の目に留まりにくいことがわかりました。冬休み明けということで準備や広報期間があまりなかったので、今後は時期も考えて実施したいと思います。

「Let`sボランティア」の認知度も上がってい

るので、来年度からは頻度を増やし、ボランティア・NPO活動センターという名前をもっと学内へ全面に押し出していきたいです。

また、協力してくれた学生スタッフからは、「どこまで声をかけたらいいのかわからない」などの意見をもらったので、マニュアルのようなものを作りたいと思います。

企画名　タイトル	勉強会「滋賀の多文化共生を考えよう！」
報告者名	小島　誠（理工学部　環境ソリューション工学科　３年次生）
日　　時	2010年７月９日（金）17時00分～ 19時20分
場　　所	瀬田キャンパス　２号館108教室
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
来場者人数	25人（うち、学生スタッフ15名）

■経緯・目的

私は以前、『スマイル』というドラマを見て、日本人が持っている勝手な偏見によって苦しめられた外国籍住民の現状や残酷な状況を知りました。現在、滋賀では外国籍住民の方がたくさん暮らしていて、そこには様々な問題があります。最近、私のアルバイト先でのお客さんの中でも外国の方が多く、私自身外国の方と接する機会が増えました。その中で、「外国籍住民と共に楽しく助け合って暮らす社会を形成するために、私たちには何ができるのか」ということについて考えるようになりました。ちょうどその時、多文化共生についての勉強会をセンターで企画中だったので、それに企画の中心メンバーとして関わることになりました。

この企画は、昨年度実施された『滋賀県多文化共生ボランティア説明会』に引き続き、県内の多文化共生ボランティアを推進するためにその取り組みに関わる方の話を聞くことで、まずはどういった現状や課題があるのか、自分自身には何が出来るのか学生に考えてもらい、多文化共生に関するボランティア紹介に繋げるという形で実施しました。

■概　　要

芝本 佳奈 氏（滋賀県多文化共生地域づくり支援センター　ソーシャルワーカー）と平田 ファビオ トシオ 氏（多文化共生支援センターSHIPS　通訳スタッフ）をゲストスピーカーに迎え、以下の進行で勉強会を実施しました。

①参加者を４グループに分け、滋賀県における外国籍住民の比率や、国籍別TOP ３を当てるグループ対抗でクイズを行う。

②ゲストスピーカーの話を交えながら、クイズ形式で日系ブラジル移民史について学ぶ。

③日本人住民と外国籍住民の交流意識の違いについてのクイズの後、ゲストスピーカーの話や夏休みの多文化共生ボランティアの紹介などをふまえて、学生ができることについて各班で考え、発表する。

■参加者の声・得られた効果など

勉強会の前では、外国籍の人に対して「怖そう」や「話しにくい」などと言ったネガティブなイメージや思い込みなどがありましたが、勉強会後には「話しかけてみよう」などと言ったポジティブな変化が参加者のアンケートに見られました。また、「これを機に外国籍の人たちと関わってみたい」、「ボランティアなどにも参加して外国籍の人と交流したい」、「日本人は外国籍の人にもっと興味を持つべき」などといっ

た声や、最後に自分自身には何が出来るのかについても「積極的に行動していく」と思っている人が多かったです。このように、まずは意識を変えていくことがボランティアにつながるのではないかと思いました。

■学んだこと・今後の課題

今回の勉強会は参加者が25人集まったものの、学生スタッフが半分以上を占めるなど、参加者層に少し偏りがありました。これに関しては、開催時期を検討するという意見が出ました。今回のケースでは、７月はテストやレポートがあったりするため、集客のことを考えると前期の６月までか後期の龍谷祭後が望ましいと思われます。

また、企画メンバーの当日の段取りが少し準備不足であると実感したので、これに関してはメンバー以外で当日だけの受付や会場設営などをしてくれるスタッフを呼び掛けるなど、事前にメンバー内でリハーサルを行い、全体を把握すべきであったことが挙げられます。さらに、ゲストのお話の途中に質疑応答の時間を上手くとっていったり、進行の中にも工夫が必要であると思います。その他にも、グループに分かれる形をとったので、参加者同士あだ名や名前で呼び合ったり、名札シールを用いると参加者がもっと馴染んでくれるのではないかとも思いました。

今回、コーディネーターと学生スタッフが協働できたのは良い試みでしたが、その反面、職員の呼びかけで始まった企画は、進め方などある程度職員が主導になってしまう部分もあり、コーディネーターと学生スタッフの立ち位置や役割を整理していく必要があると思います。

企画名　タイトル	世界丸見え！～ゲームで体験！あなたとつながる貧困問題！～
報告者名	不破　歩美　（国際文化学部　国際文化学科　２年次生）
日　　時	2010年７月13日（火）17時00分～ 19時20分
場　　所	瀬田キャンパス　学生交流会館カンファレンスルーム
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
参加者人数	合計31名（うち、堀川高校生４名・学生スタッフ６名）

■経緯・目的

私は、センターの事業である『海外体験学習プログラム』参加者として、より多くの学生が国際問題について真剣に取り組めるキッカケになるような企画をしたいと考えていました。そのために、一昨年行われた『世界がもし100人の村だったら』（以下、『100人村』）同様、ゲームを交えながら日本にいる私たちが南北問題・移住労働者など国際問題に関係していることを感じてほしいと思っていました。そして、『100人村』に参加した学生にとっては、ステップアップした学びにしてほしいと考え、この貿易ゲームワークショップを行いました。

また、深草キャンパス近辺のNPOのスタディーツアー体験談や瀬田周辺の多文化共生ボランティアの紹介をすることで、学生でも地域で国際分野の活動に関われることを知ってほしいと考え、後半はこれらを行いました。

■概　　要

【第１部】貿易ゲーム（17：00 ～ 18：30）

「貿易」が世界の人々の暮らしにどのような影響を与えているか、疑似体験を通じて理解する参加型のワークショップ

ファシリテーター：大槻 一彦　氏
　京都府立堀川高等学校　教諭
　国際理解研究会「みなみの風」副代表

【第２部】センター学生スタッフによる国際系ボランティアの紹介　（18：40 ～ 19：20）

①特定非営利活動法人　ACCE（アクセス）
『フィリピンスタディーツアー』

②多文化共生支援センター SHIPS
『おうみ多文化交流フェスティバル』

③財団法人　大津市国際親善協会
『外国籍児童学習支援ボランティア』

■参加者の声・得られた効果など

「貿易ゲーム」による学びの後、学生が意欲的に国際ボランティアの紹介を聞いていました。やはり、ワークショップを行った後では、学生のモチベーションが全然違うと感じました。また企画終了後、国際ボランティアを紹介するブースに大勢の人が集まりました。国際問題に関心のある学生や、何かあれば国際ボランティアに参加したいと考えている学生がたくさんいることをそこで学びました。もっと学生が国際問題について学べる機会があれば、もっと世界が変わるキッカケになると思えました。

参加者からは次のような感想が得られました。

- 貿易ゲームってどんなのかなーって思っていたけど、想像以上にすごかった！！途上国の気持ちが少し分かった気がします。
- 途上国の人たちの気持ちが初めて実感できた気がしました。「もう３回生」と思っていたけど、「まだ３回生」だと思えた。

■学んだこと・今後の課題

- 一昨年の『100人村』を参考にしたおかげで、事前準備に必要なことや一昨年の改善点であった会議の回数を考えながら行動出来ました。やはり、継続して続けることはとても必要であることを学びました。
- 当初、企画メンバーは「貿易ゲーム」がどういったワークショップなのかを理解しないまま活動していたので、最初に企画メンバー全員で自主的にワークに参加してから活動すべきでした。

- 当日の打ち合わせが企画メンバーでまとまっていなかった。もっと前からリハーサル日を設けるなどして、企画メンバーが当日のイメージを出来るようにするべきでした。
- 当日のスケジュールがだいぶ乱れてしまい、終了時間が20分も遅れてしまいました。そのため、企画終了後、国際ボランティア紹介のブースに多くの学生が集まったがしっかり対応出来ませんでした。このことから、今後は会場の後片付けも踏まえて、もっと時間に余裕をもったプログラムにする必要があると感じました。

企画名　タイトル	ボラ展～ボラセンだよ！全員集合！！～
報告者名	氏名　菱本　柚香　　（国際文化学部　国際文化学科　１年次生）
日　　時	台風のため中止　※当初予定…2010年10月30日（土）11時00分 ～ 15時00分 31日（日）11時00分 ～ 15時00分
場　　所	台風のため中止　※当初予定…瀬田キャンパス　４号館219教室
実施主体	ボランティア・NPO活動センター　（瀬田）

■経緯・目的

今年度、ボランティア・NPO活動センターが設立10周年を迎えるにあたり、過去にどのようなセンター事業が行われていたのか、学生スタッフ自身が知ることで今後の活動に役立てられるのではないかと考えました、

そして、それを龍谷祭で展示することで学内外の人にセンターの存在を知ってもらい、センターの取り組みを理解してもらう機会とし、一般学生を含めた来場者のセンター事業に対するニーズ調査を行うことを目指しました。

■概　　要

- ボラセンの活動紹介展示

過去…災害ボランティア、龍谷で出会うもうひとつのアート展、平和セミナー＆パネル展～僕は13歳、職業 兵士。～、「世界がもし100人の村だったら」、ボラセン's room、レジ袋削減プロジェクト

現在…勉強会「滋賀の多文化共生を考えよう！」、貿易ゲーム「世界丸見え！」、出張ボラセン「Let's ボランティア」、丸屋町商店街夜市ボランティア、大津祭ボランティア、福祉企画「FUKUSHI体験！秋のボランティア祭」

未来…今後、どのような分野のボランティアや企画が求められているのかをアンケート調査

- 国内研修で訪問した瀬田地域の団体紹介展示

団体…風の子保育園、まちかどプロジェクト、おおつ環境フォーラム、鳰の湖音楽集団、瀬田川リバプレ隊

- Re-キャッププロジェクト展示（見学ツアー含む）

見学先…むつみ園、エコパレット

- 学生スタッフが活動したことのある団体・施設のボランティア募集チラシを設置

■学んだこと・今後の課題

今年度の龍谷祭は台風14号の接近のため中止となり、それに伴い展示も中止になったので非常に残念でした。

実施に向けての準備について振り返りを行った際、企画メンバーが全員新学生スタッフだったため、ミーティングの進め方にスムーズさが欠けていたり、情報共有の不足があったので改善が必要だという意見がありました。その他にも、企画メンバー以外のスタッフの当日の仕事に対する説明が不足していたので、来年度はちゃんと伝わるようにしておかなければいけないという意見がありました。

また、ミーティングは６月頃から行っていたにも関わらず、直前に焦って準備していたので、もっと計画をしっかり立てて進めていきたいと思いました。加えて、夏休みには活動できていなかったので、来年度は夏休みという期間を有効利用していきたいと思いました。

今回展示できなかった分、12月に実施する10周年記念講演会で、龍谷祭のために作成したものと新たに作成するものなどを通して、来場者にセンターの事業や学生スタッフの企画について知ってもらえればいいなと思います。

企画名	サークル登録制度（サークル＆ボランティア活動　情報交換会）	
報告者名	西島　有恒（瀬田キャンパス　コーディネーター）	
	深草キャンパス	瀬田キャンパス
サークル情報交換会実施日時	2010年４月21日（水）、５月27日（木）、６月24日（木）、11月25日（木）、2011年１月13日（木） いずれも12時30分～ 13時00分	2010年４月22日（木）、５月27日（木）、７月１日（木）、11月25日（木）、2011年１月13日（木） いずれも12時45分～ 13時15分
場　　所	１号館104教室	ボランティア・NPO活動センター
登録サークル名	京炎そでふれ！輪舞曲 学友会学術文化局ボランティアサークル里山サークルきのっこ ぷるたぶOHANA ！ ※その他情報交換会のみの参加２団体	沖縄三線サークル うみんちゅ Get Loose 社会福祉研究会～ s.w.a.p ～ そでふれよさこいサークル華舞龍 瀬田BBS会 ／ 学生団体 FAVLIC マジック＆ジャグリングサークル Mist IVUSA龍谷 ／ Com.fashion
実施主体	ボランティア・NPO活動センター	

■経緯・目的

学内においてのセンターの認知度向上、サークル単位でのボランティア活動の実態の把握、センターとサークルとの連携の促進、サークルでの技能を活かしたボランティア活動の促進といったことを目的として、サークル登録制度を実施しています。

■概　　要

• サークル情報交換会

サークル同士のネットワークづくりやサークルの活動に役立つ情報の提供を行うことを目指して定期的に実施しています。

情報交換会ではセンターの機能を紹介するとともに、各サークルにもそれぞれの活動紹介をしてもらいました。また、サークルに対する有益情報(活動場所の情報提供や助成金情報など)の提供を行うともに、「サークル自身の特技をそのまま活かして、ボランティア活動につながること」や、「サークル登録制度」について説明を行い、趣旨に賛同したサークルには登録してくれるよう呼びかけました。

• ホームページへの掲載

今年度新たにセンターのホームページに、学内サークル等への登録の呼びかけや登録サークルの活動内容などを掲載しました。

■参加者の声

• 運営に困ったときに相談に乗ってほしい。
• 他のサークルやセンターのつながりを作りたい。
• 助成金情報などがもっと欲しい。
• 自分たちの活動を活かせるボランティア先を紹介して欲しい。

■コーディネーター所感

今年度は、両キャンパスで５回ずつの情報交換会を行いました。人数は少ないものの、毎回数サークルの参加がありました。登録サークルの中から助成金へ応募するサークルや、学内や地域からの依頼を受けて活動するサークルなどがあり、この制度が少しずつですが、活用され始めていると思います。

また運営などの相談をセンターが受けたりすることもあり、登録サークルにとってのセンターの役割も少しずつですが重要なものなってきていると思います。

学内には魅力的なサークルが他にもあり、さらに活動を充実させることが可能だと思います。そのためも、学内での認知度向上や情報収集にも努めていきたいと思います。